西学と日本の蘭学」という二つの論文からなっている。前者は種痘が世界各地へ普及するのに実は複雑な経過があり、その歴史的背景を知ることが医学史の研究者にとっても如何に大切であるかを知らしめるもので、後者は同じ東アジアの儒教文化圏にありながら、日本の西洋医学の受容が中国や朝鮮とはかなり異なったものであったことが明快に説かれている。

第四章「ヨーロッパ医療界における蘭学のモデルの位置付けについて」は、日本における西洋医学の受容の流れを歴史的に概説したもので、著者によれば、十八世紀にはオランダのギルド外科医界の医学書と技術を日本は受容したが、十九世紀後半にはそのモデルはオランダ軍医学となり、明治に入るとドイツ軍医学となった、という。しかもこれはヨーロッパの医療界の歴史的変遷を反映したもので、フランス革命が大学やギルドという伝統的特権的組織を破壊してしまったが、多くの戦闘が有能な医療職を必要とし、また産業革命が実際的な技術教育を高等教育にも求めたため、ヨーロッパ各地に軍医学校が設置されることとなった。さらに十九世紀後半には大学もまた陸軍軍医学校に追随して改革されることになり、日本もこのタイプの医学教育を受容した、と解説されている。説得力のある、誠に重要な論説であろうと思われる。

以上本書の内容を簡単に紹介させて頂いたが、誠にすぐれて示唆に富む論著であり、特にオランダにおける著者の精力的なご調査に深く敬意を表したいと思う。

（津田　進三）

〔思文閣出版・京都市左京区田中関田町二―七　電話〇七五―七五一―一七八一、一九九二年、Ａ５判、三六六頁、定価四九四四円〕

小高　健著『伝染病研究所』

どうしたわけか、医史学会から書評を命ぜられ、まずは本が届いた。立派な装丁で厚さも手頃、カバーをよくみるとセピア色の古ぼけた写真、淡モノクロの大きく写した伝研の姿に思わずうなってしまった。

著者は大学卒業後伝研で三十七年間奉職、研究生活の後停年退官されるにあたり、ちょうど創立百年になる伝研の歴史について本書を公開された。恐らくは御自身の墓碑銘を刻むおもいであろう。また著者は東京大学百年誌の刊行にも参加され、記録を辿るうちに公文書記録からはみ出る人物像も捨てるにしのびなかったのではあるまいか。充分すぎる程の資料を漁り、江湖の批評にたえ得る緻密な考証。つまり本書は物語りではなく、記録として医史学的な価値の高い研究であるが、他方著者の筆は百年の歴史を色どる様々の群像を鮮かに再現、あちらこちら思わず吹き出してしまう「傑作」もおりこまれ、読む人を飽きさせない。

百年の歴史の中の火花は何といっても北里が文部省移管に反対して北研を作るくだり、二次大戦後予研の分割、医科研への看板かけ替であろう。それにしても常時問題のたえない

処であったようだ。明治初年の病院は国公立、私立を合せ百に満たないが、細菌学の勃興と共に必要に迫られた傷病人の収容施設であり、伝研はその時流にのった花形役者であったろう。一匹狼の俊秀が集まるのも無理はないが、その組織作りは容易でなかったろう。

学者も人間だ。学問も変転するが、人間模様も躍動している。功をあせって確証もないまま発表したり、間違いだったと判っても一門の名誉の為に容易に認めないとか、外野席からみると面白い。人間集団である以上、人間力学も避けられぬ。それが史学の面白い処でもある。多数の意見に基づいて、筆をおさえた公正な評価でありながら、人物が躍動しているのは著者の文筆力。また時代が要求したのであろうが、登場人物も今より一段とスケールが大きい。組織の長としていつも考えさせられることは、波風たてず万事人の和を重んずる方と一将功成り万骨枯るゲンコツ型のあることで、本書に現れる指導統率者にも色々と教えられることが多い。本書にキイ・ワードをつければ医学、伝染病、研究所、学者であろうが評者はこれに人物像を入れたい。それ程に面白い。広く好学の士に御一読をすすめる所以である。

評者は昭和六十一年の停年まで五、六年間縁あって医科研の非常勤講師を命ぜられ、多少この館に出入りもし、出張先として外科の若い人達を預かったこともある。また登場人物も田宮猛雄を始め、本書の後半には自分の眼でみ、謦咳に接し、また教えを受けた方々が現れるので巻をおく能わず、一気に読み通した。評者も歴史上の人物になれるわけはないが、歴史上の人物に近づきつつあると苦笑せざるを得なかった。

（高橋　勝三）

〔学会出版センター・東京都文京区本郷六―二―一〇、☎〇三・三八一四・二〇〇一、一九九二年刊、四六判五五〇頁、四八〇〇円〕

『病気の起源』

トーマス・マキューン著、酒井シヅ・田中靖夫訳

この本は、英国のバーミンガム大学の社会医学担当名誉教授であったトーマス・マキューン博士が、一九八八年に出版したものの翻訳である。なお著者は出版の数カ月前に死去した。

著者は、あまり例を見ないユニークな切り口で、人間の病気の直接的原因（cause）ではなく起源論（origin）を展開し、人間の目指すべき方向や健康のあり方を提起している。

著者は人間の歴史を、狩猟・採集時代、農耕時代、工業時代の三期に分け、各時代における人間の生活条件と人口の変動との相互関係から、不健康の原因として食糧不足による栄養問題に特に注目する。即ち、狩猟・採集時代に死亡率が高く寿命が短かかったのは食糧不足のためだと論じ、農耕時代では密集した大集団を維持するために定住化による農業の導入が不可欠であり、その結果食糧の供給量が増えて人口も増加した。しかしながら、家畜や他の動物と一体となって不潔